

大分県自閉症・発達障害支援センター開設記念講演

講師：石井 哲夫 先生

2005年4月23日(土)

ご承知のように、発達障害者支援法が施行されたわけですが、これは、異例法と言われ、そういう方向でこの福祉・教育を進めるといふその考え方を述べたものであります。そこには、国及び地方自治体のして欲しいことがきちんと書かれているわけですが、その次には、本当にこれをどう進めて行ったらいいのか、支援という言葉は、大変曖昧な言葉でありますから、もっと具体的にどう援助したらいいのかということを書くべきではないかと思っているわけです。

最近、障害者自立支援法という法律が出てきまして、これは、現在の法律の中で、身体障害者福祉法・知的障害者福祉法・精神障害福祉法の3法を踏まえて検討されるという内容ですが、一昨日、自民党本部でこれをどういう風に考えるかというようなことの委員会があり、そこには衛藤副大臣も出ておられました。最後の方に、発達障害という言葉も付け加わっていましたが、いつもお供え物のように発達障害とか、自閉症という障害名が付け加わるのは、実は国民がまだ発達障害とか自閉症という言葉を知らないからなのです。そういう中で、残虐な犯罪が起きて発達障害という名前が出たり、自閉症という名前が出たりする。それで、事実調べてみると、まさしく自閉症であるということが分かる。例えば、浅草事件というパンダ帽をかぶった男が若い女性を刺殺するこれはもう本当にあってはならない残忍な行為であります。しかし、それを犯した自閉症の人は、どういう境遇に置かれてそういう犯罪を犯すようになったかということについては、誰もはっきりさせていないわけです。私は立場上そういったことにも、もちろん目を向けておりまして、担当している弁護士さんと会って話をし、今、共同研究でこの自閉症の犯罪という問題について関わろうとしております。この方も、自閉症だから犯罪を犯したというのではなく、今まで自閉症に差し伸べる福祉や教育の手がなかったということなのです。家族が支援できなかったという問題であります。所沢事件、長崎事件、豊川事件と色々な事件の中で登場してくる自閉症の姿を見ると、本当に国民なり関係者が自閉症を知らない。そのことを皆さんに訴えたいと思うわけであります。

幸いこの地に、自閉症・発達障害支援センターができました。でも、それは、全国でまだ少ない、大分県に1つでありますし、職員4名であり、その4名の職員が、相談と療育とそして関係機関との連絡、就労支援、または啓発活動そうしたものに關わるわけですから、当然、十分にできるはずはありません。私は、同じ東京都自閉症・発達障害支援センターで行っておりますけれども、毎日のように絶え間なく電話相談が入ってきます。そういう中で、『家庭内での暴力で痛めつけられて、そこで縛り付けられたように動けない母親』『離婚をしてしまって父親がいなくて、その子どもは大変優秀な大学を出ているのに職に

も就けないようなアスペルガー障害の人』の相談が入ってくる。また、『親がアスペルガーで子どもが自閉症で生活をしていて、生活保護を受けられないというような状態で情報をもらえない』それを、例えば今、地域で障害者の自立支援を行うという法律が出てきた時に、具体的に誰が、どういう形でこの支援を行っていくかというその姿が見えないのであす。ですから、私自身も発達障害者支援法を成立させる時の議員連盟の方々にお話ししたのは、本当に具体的に国民が自閉症を理解して、そして、自閉症に関わる人を1人でも多く増やしていく為の政策を地方自治体において実施できるその行政の実を上げるということだろうと思ったので、大分県においても具体的にどのような実態があるのかということをも明らかにして、その実態に対して、効果のあるそういう行政を進めていって頂きたいと思うわけでありす。一方において、社会福祉基礎構造改革で、施設への福祉援助を地域における福祉援助に替えようとしています。もちろん、その考え方については全面的に賛成であります。しかし、具体的にそれを実施するお金があるのかどうか。今、厳しく福祉財源をどんどん縮小されてきているような状態で、具体的に自閉症の人を受け容れられるグループホームとか共同作業所とか、そうしたものができののだろうか。あるいは、特別支援教育というものが始まってきているのも、その高機能を軽度と言っている認識では甘い。自閉症にしても、学習障害にしても、あるいは、注意欠陥多動性障害にしてもその実態というものをよく把握している当事者団体から内容を聞いていった時に、ある人は非常に理解さえしてくれればちゃんと働けるんです。そういう人も居ます。しかしながら、それまでに積み重ねられた社会の無理解によって傷ついているその人たちが、そう簡単に教育を受けて社会参加ができるという風には思われぬ。そういう、考え方も決定的外れなものではないと思うわけでありす。ですが、私が40年余り自閉症に付き合ってきて、本当に自閉症は難しいのだということを知って頂きたい。そんなに簡単に、「こうすれば良い」というシステムで解決できることではないのです。だから、昔から、感覚運動療法、統合療法とか行動療法とか TEACCH とか色々考えてやって来ているわけで、その人たちがずっと長く関わってやって下さるってということは、大変大事なことなのです。しかし、本当にそれによって良くなっているだろうか、就労できているのか、社会的な自立ができているのか、こういうことをきちんと確かめていかなければならないと思います。私自身、今、東京都自閉症・発達障害支援センターにおいて、高機能の自閉症、アスペルガー症候群の人たちが、30代、40代になってどう生活しているかという実態を調べておりますけれども、残念ながら私たちのところに来ている人は、上手くいっておりません。非常に苦労して生活をしています。なぜかと言いますと、いわゆる知的障害を伴う自閉症も難しいかわけです。施設で今まで引き受けてくれない、作業所でもなかなか引き受けてくれない。なぜかという、その人たちの理解の仕方、返し方が分かっていないからです。同じ障害、同じような障害に関わっている福祉、教育の人でも知的障害は分かるけれども、自閉症は分からない。そういうことがあるのです。では、自閉症というのは丸っきり何もできないのかということ、そんなことはありません。今、自閉症協会の副会長である須田さんという大

変立派な女性が居るのですが、その方が、埼玉県の川越で、「けやきの里」という法人で、施設を運営しております。その施設の中に「やまびこ製作所」という作業所を造って、レットという大きな荷物を支える時にフォークリフトを差し込む下の板の釘打ちをハンマーを使って、それからいわゆる電動ハンマーで釘を打っていく作業を自閉症の人がやっています。そういう人たちは誇りを持って「自分たちはこの仕事をやっているんですよ」ということを私たちに自慢する。そして、その人たちが、グループホームという寮で生活をして、親元に帰って行く。古い自閉症の（会）幹部の親の人たちとこの間、夜に懇談をしました。今、高機能の人たちが色々問題になってきてそれも大変だけれども、では、知的障害を伴う自閉症の人たちをきちんと育てるための、そういう実践というものはどこで、どういう風に行っているかということ、やはりきちんと世の中に報告をしていかなければいけないのではないかと。その時にも、あえて言うならば、つまり、そう簡単に良くはならないけれども、確実に良くなる方法が1つある。その1つは、まずやはり、その自閉症の人たちに人間として大事に愛情を持って関わって、長期にわたって諦めずに、教育を行うことなのです。指導を行うことなのです。指導の方法については、どんな方法を取っても良いと思います。それこそさっき言ったような、行動療法にしても、TEACCHにしても、効果のある方法はどんどん取っても良いけれども、それを長い年月かけて、そして関係している機関の人たちが協力し合って、連携し合って、「お前のやり方はダメだ」とか、あるいは「お前とは一緒にやれない」なんていうような仲違いをしてないで、『どうやったら上手く教育できるか』『上手く援助できるか』ということの連携を良く図って行っていく。その中心は家族です。家族は抱えているのです。じゃあ、家族が居なくなったらどうするのか。施設なのです。つまり、グループホームももちろん大事であり、デイケアも必要であり、ホームヘルプも必要である。しかし、自閉症の子どもにとって非常に大事なものは、家庭であり、家族であり、施設であります。この考え方はきちんとしておかなければいけないところです。施設は、一般の社会福祉援助論では否定しています。それについては、私は反対ではありません。施設へ子どもを閉じ込めておく必要はない。そういう人はどんどん社会に自立して行く。これは当然です。しかし、いくら社会に出てもその受け皿がない時に自立できなければ、誰が援助するのかというと、援助者集団が必要なわけです。その援助者集団というものはどこに居るのか。今の制度の中では、その拠点がなければ援助者集団は生まれません。もちろん色々な地域につながる色々な援助団体がありますから、そういう団体もどんどん勧めていけば良いと思うのですが、しかし、資金がなければ続かないわけです。高齢者のボランティア活動だけでこれをやろうというのは無理なのです。やはり、専門援助者を養成するという仕組みを社会の中に作って行かなくてはなりません。それは、例えば、社会福祉士、介護福祉士、保育士、精神保健福祉士というような資格ではありません。臨床心理士もそうですけど、資格で専門家はつくれません。資格は1つのシステムです。本当に専門家をつくるのは、経験を重ねることです。そして、きちんと指導しているところから学ぶこと、お互いに学び取ることです。一番大切なこと

を教えてくれるのは自閉症本人です。本人から学ぶ姿勢。ですから私は本人の書いている本、例えば、ドナ・ウィリアムスとかテンプル・グランディンとかもっと言えば森口奈緒美とかニキリンコとかそういう人たちの本を読むことによって「ああ、自閉症の人はこのように、世の中のことが分かっていないのだな」ということを、私たち自身は改めて認識することができます。それと、もう1つは、本で見ているだけでは分かりません。自分が24時間抱えている親が非常に良く分かると思います。親から話を聞くことが、極めて重要であります。しかし、その親も、正直なところだいぶんまいっています。浮き沈みもありますから、時には、子どもに対してあまり好ましい感情を持ってない場合もあります。そういう時に、親を支えている支援者とか、教師とか、そういう人からも話しを聞く必要があるわけです。ですから、この、めぶき園とか、あるいは今度できる支援センターが重要なのは、そこで仕事をしている専門職員から話を聞くという機会を持つことが、極めて大事だからであるということをお願いしたい。

それでは、レジュメに沿って話をしていきたいと思います。

比較的詳しく書きましたから、読んで頂ければお分かりになると思いますけれども、私は『はじめに』というところで皆さん方にまず考えて頂きたいことを述べました。つまり、先程も話しましたように、どれだけ立派な政策・制度、そしてそれに基づくシステムとか、また、外国で成功しているような色々な学者の考え方やしていること、それはツールですけども、そういう考え方があったとしても問題は自閉症に関わる人と自閉症のコミュニケーション、対人関係が大事なのです。自閉症についての診断基準は、国際的には、WHOのICD 10とアメリカの精神医学会のDSM がございますから、それをご覧になれば分かると思いますけれども、共通して言っていることは、知的障害を伴う場合には、言語とか、情緒とか、あるいは言葉とか人間とのコミュニケーションとか、人間の考えていること、つまり、相手の考えていることが分からないといったようなことがあります。高機能の人たちは、知能は高く、言葉の発達も顕著である。そしてまた、色々な認知能力も発達している。そのために、基本的な学習テストの成績が良い。そういう、基本の、共通である人間関係のコミュニケーションが上手くできないということは、具体的に考えると『人との対応が上手くいかない』『人から言われても応じられない』『人の期待することは分からない』『人のして欲しいことの裏の意図を読み取ることができない』ですから、無理強いすれば人が嫌いになる、人から離れようとする、うんと叱られれば心の傷ができる、心の傷ができればその嫌な思い出というものが蘇ってくる。フラッシュバックと言って、似たような状態を察知すると、それだけでおかしくなってパニックを起こします。そういった、外側から見て、どこにも問題のない、身体も不自由でなさそうである、目も見える、耳も聞こえるというような従来の障害概念では捉えられない心の障害がある。心の障害と言うと、精神障害と同じと思われるかもしれないがそうではない。精神障害というのは、ある時期まで普通に暮らせていて、普通に育っていて、ある時期から統合性失調と言われたり、鬱病と言われたりするように精神的働きが変わってくるのです。発達障害の場合に

は、かなり早い時期、大体 2~3 歳前に発症が見られる。発症が見られるというけれど、その原因はおそらく脳の機能的な障害ではない。今、脳の働きが分かるような機械というものができてきて、色々なところでの神経系の働きが間接的にですが、特定の場所が分かるようになってきたと言われていて、また、こういう障害というものはかなり、遺伝子的な問題も入ってきているのではないかとされており、兄弟で自閉症、親子で自閉症というようなことが多いことも最近分かってきております。だからといって、遺伝だという風に簡単には決められない。遺伝子の生成過程というのは色々ありますから、これは医学的にもこれから研究を待たなければならぬことではありますが、とにかく、脳の機能的な障害というのは、どこがどうなって、どういう風におかしくなっているかということは簡単に言えないのです。ただ、脳の働きの中で、一番大変なことは、現実の状況を認知してそれに対して自分を変えていくという動きです。そういう自己調節の働きというものが、極めて出来にくいというところがまず認められる障害であると言えるわけでありませう。その辺のところは、具体的に自閉症に接した人が、なんでこの子が人の言うことが聞けないのか、人が怒っても、その時は止めるけれども何度も繰り返すのか、こういうような普通の子どもを育てる育て方では上手く育てられないということをおっしゃるわけですね。それには、このような理屈を私は立てているのですが、普通の子どもの場合には、親の存在というものを早くから認めます。それは、どうして親であるということが分かるかという、温かい肌触りとか、まず感覚ですね。それから、優しい声掛けという声の識別、それから、触られて、擦られていい気持ちになるという、そういう自分に働きかけるその状態の快さ。そうした、自分の快感に関わる刺激を発している、刺激体としての親の持っている意味を、色々な場面、色々な事柄を繋ぎ合わせて、その関係を悟るという、そういう自分を取り巻く状況の認知を、できる人とできない人がいる。普通の人にはできるのです。だから、お母さんというのは自分にとって良いことをしてくれる人と認識している。お父さんも同じです。そういう認知が早く生まれるのです。自閉症の人は、なかなか自分の親全体をまとめて見て、親という意味を抽出する働きができない。だから、そこでいつまで経っても、親と子の関係が成立しないわけですね。だから、親の方にも、これは親の方には失礼かもしれないけれども、普通の子どもから見ると反応が返ってこないから、そういう、お互いの応答関係が上手く成立しなくなってくると一方的にお世話をするという関係が出てくるわけですね。このような、一方的なお世話をしている限りにおいては、応答関係も育ちにくくなります。子どもも一方的に動いていく。欲しい時には寄って行って、させるけれども、ちょっと嫌なことは逃げ出して寄り付かなくなるというようなことが起きてくるから、子どもが可愛いと思っている時間、期間というものは比較的短いのではないのでしょうか。絶えず、その子どもに接していて、絶えず心を配ってあげれば、山あり谷ありと越えていても、トータルとしては親子の関係は切れないのですが、彼らは常に親子の関係が切れやすい状態に置かれるということは知っておかなければならぬわけですね。そのために、社会福祉施設があって、親が子どもを家庭生活内で困るから施設に預けようというようにして解決

をしてきたのですが、それでは親子の関係はますます薄れてしますので、施設に子どもを預けるような形での施設政策は少なくとも当面よく考えて変えていかなければいけないのではないのでしょうか。施設に子どもを預けても、親が施設を訪問するとか、子どもが時々家に帰れるような弾力性を持った施設の使い方、そうしたものも制度的に検討していかねばならないのではないかと思うわけです。親子ですら関係をつくりにくい状態が、ましてや友達のように、手加減したり、世話をしてくれる親のような人とは違う人と対等の関係が生じるはずがありません。ですから友達付き合いもできにくくなります。しかし、そうは言っても、全く発達しないわけではありませんから、学校に行って、特定の友達と一緒になるということもある。いわゆる友達に見えるけれども、それほどお互いに話をするわけではないが一緒に居るような機会もできてくるということになる。高機能の人は同じ障害は持っているという同志感というようなものが生じてきます。ですから、そういうグループの中に入りたがるのですが、本人たちは人間関係の運輸が下手ですから、なかなかそういう会を作って、当事者の会に発展させるなんてことできにくいわけで、どうしても親が中心になって、その関係を作っていく。ですから、日本自閉症協会も始めは、各地で親の会自閉症親の会ができ、それが全国協議会となって、社団法人になり、日本自閉症協会になったという経緯があります。やはり、中心は親なのです。

話がちょっと反れましたけれども、親だけではなく、私のような援助者も長いこと援助すると、本当に自閉症に子どもが愛しくなります。愛しいという言い方は変な表現ですけども、可愛くなります。だってそうじゃないですか、外から障害と認められないで邪険にされたり、学校に行ってもイジメに遭ったりしてしながらも、彼らは生きていかなければいけないのです。それに耐えながら生きている姿というものは本人の身になって考えれば、本当に大変なことだろうと思うのです。周りの人はその前に、叱ったり、それから、本人の苦しみになるようなこともするけれども、本人はそれに耐えていかなければならない。その拳句で事故を起こして怪我をしたり、死亡したりするということもある。私たちのこの社会というものは、やはり、言ってみれば強者の世界。弱肉強食という形は変わっても、それに近い社会ではないでしょうか。まだまだ、文明社会の道は程遠いと言って良い、機械器具は発展し、生活は便利になったけれども、人の心の中で、人の命を大事にし合うというような意識は変わらない。戦争が絶え間なく起きている現代においては、仕方ないとは言いながらも、私たちは何とかして、少なくともこの日本においては障害を持つ人たち全てが暮らしにくいという状態を少しでも変えてあげたいと考えているわけです。つまり、人生限りがあるのですから、どう暮らそうとそれは自由であります。お金を儲けてお金持ちになって、お金が沢山あって使い切れなくても、死ぬ時は死ぬんです。だから私は、よく言うのですが、自分が充実した世界を、自分の人生に求めようとするのは色々な価値観があるけれども、自ずからできてくるのはやっぱり、自分の命を大事にする気持ちは間違いなく各人が思っているのです。そして自分の命は1人だけで生き続けられると思っている人も多いけれども、客観的にはそのようなことはあり得ないので、お互いに連

帯しながら、援助し合いながら、暮らしているのです。しかし、機械化されてくると、その直接援助が見えない。隣近所の人でも付き合いがなくなってくる。そういう中で、学校とか、幼稚園とか、保育所がこういう社会になってきているのだということを、よく知った上で、これからの療育とか、子どもの育て方をどのようにしていったら良いのかということを考えていくのでしょうか。実は私は、もう1つ保育士養成協議会の会長という役割を持っております。保育士は沢山居ますけれども、子どもを育てようという気持ちを持っているのでしょうか？その人たちは、現場の中で大変子どもを可愛がっています。そうすると、そこで微妙な変化が起きるのは、「自分の子どもを産んで育ててみたい」という気持ちが強くなってきます。その、自分の子どもを産んで育ててみようという気持ちが本当に本能的なものなのですが、機械文明の進んできた今日では、それを人の子も受けて一緒に社会の子どもとして育てていこうという職業になってきているわけです。それが、保育士なのです。ですから、私が保育士に言っていることは、「自分の子どもを育てようという気持ちと同じように人の子どもを育てようという思ったことが、非常に重要な人間性を発見する元になってきているのだ」ということです。社会の人たちが全部子どもを可愛がって、子どもを育てようとするれば、少子化の傾向は変わってきます。どんどん子どもを産んでいくでしょう。これは変な話ですけれども、自閉症の子も、どんな子どもでも生まれた子どもを大事にしよう、障害を持っている子どもも大事にして育てようという気持ちを全国民が持てば、それは、障害児であるという判定を早く出すことが大事なのです。なぜかという、私たちは、普通の人同士の暮らしの中では、かなり厳しい生存競争が行われるわけです。相手が障害児や障害者であれば手加減をし、労わり、援助しようという気持ちになる。だから先程言いましたように、江戸時代では、按摩・針灸というのを視覚障害者の独特な独占の仕事にしたという保護政策を取っております。今の障害福祉政策の中でも、様々な特典を手帳制度で与えています。現在それは、知的障害においては知能テストによって与えています。知能が高い人たちは、手帳をもらえません。それに伴う特典は得られないという状況です。ですからそこで、先程にも話が出ましたが、障害の谷間に置かれた発達症という、自閉症はずっと障害の谷間に置かれて、障害者基本法でも付帯事項でしか付いていない。その付帯事項は空風に過ぎなくなっていて、そして、発達障害者支援法が生まれたということになるわけであり。話が度々ずれて申し訳ないのですが、つまり私たちがここで考えていかなければならないことは、「いかにしたら自閉症の人たちを我々の世界の中で、少しでも人との関係が増えていくような育て方ができるだろうか」ということなのです。つまり、私たちが色々な教育機関、指導官を持っていますけれども、基本的な指導官は見えるところを良くして行こうということであって、見えないところまで目を付けて行こうということとはできないわけです。でも、その自閉症の人たちは、脳の機能障害として人が求めるようなことが分からないし、人が何を考えているかっていうことが分からない。その人の心に添うとか、社会の基盤に決まりを守って行こうというようなことができない。ですから、こういう中で、自閉症の人や子どもさんがいらっしやる

だろうけれども、時ならぬ時に大声を立てたり、動き回ったりすることは、ここがそういう場所であるという認識ができていないのです。ですから、皆さんが居ても、平気で動き回るわけです。例えば、デパートに連れて行って、欲しいものがあるとスーッと取ってしまい、お母さんはビックリして叱る。その叱るのは、人の手前、親の義務であるから叱るのです。いくら叱っても言うことを聞かなかったらどうするかと言うと、もうこの子は自分の子どもではありませんと否定する。そして、分からないように遠くへ行ってしまうという人もいるかもしれない。事実、親から「電車の中で、私は我が子と離れたところに居ます。時々大騒ぎしても、この子の親は誰だろうってみんながジロジロ見るから、遠くで分からないようにしているのです。」などと言われることがあります。これを「酷い親だな」と皆さん思うかもしれないけれど、私も親になった気持ちというのはなかなか分かりませんが、事毎に苦労して、気兼ねして、気遣いをしたらもう疲れ果てて、暮らしていけなくなるのです。時々息を抜くようにして施設に子どもを預けたくなるっていうのは当たり前のことなのです。親も親の生活があるわけです。ですから、私たちは、そういう意味でこの福祉の仕事を選び、教育の仕事を選んできたのですけれども、本当に親の代わりになるのか、親の生活を援助できるようなそういう力を身に付けることはできるのか、それが求められて来ているわけです。私が、初めて自閉症の子どもに関わったのは、もう今から、かなり前ですね。30年以上前です。その時はもう、夢中になって子どもを叱りつけたり色々やってみました。ただ私の先生である平井信義先生は「受容ということが大事だよ」「相手の気持ちを受け容れて、相手が納得し、相手が自分からやるようにさせなきゃダメだ」という風におっしゃいました。ともかく、この子は自分で育つ力があるからじーっと待った方が良いというようにおっしゃったのです。私は最初それで上手くいくのかなと思っていましたが、残念ながら、受容だけでは子どもが育たない。つまり、受容という考え方を本当に理解したら、それは黙って見ていることじゃないのです。その人の、存在を大事にするということが受容であって、その人が社会の中で生き活きて生きられるようにすることが受容なのですから、教育もしていかなければいけないのです。そこで私は、受容的交流という言葉をつけて、30年前に本を書きました。その時には、受容的交流療法を課題的交流療法という、課題的という言葉を使っています。世の中にはやらなければならない課題が沢山あるのです。『それをさせることが援助者である』という考えで、その課題をさせるためには何が必要かといえ、交流することであり、そうすると、私の言うことを聞いて貰えるような関係にならなければなりません。叱りつけてやらせてみてもそれは一時的なことであり、自分から「僕はできるのだ」「僕はやればできる」という経験をどうしたら与えられるかということでもあります。それは、ヴィゴツキーという人が、発達最近接領域という概念を出していて、それに私は、示唆を受けて、一番大事なことは、ちょっとでも努力すれば必ず成就感が味わえる。できるようになる。例えばこのペットボトルのキャップをほとんど閉めて、最後の一回りだけを「閉めてごらん、ちゃんと閉まるよ」と言った時に、相手が閉めたとする。すると、フタをこのボトルの口にあてるのが嫌だった子

でも、「もう既に回っているのだから、あと一努力すれば良くなるのだ」と意識をして閉める。そういうことを発見したわけですね。つまり、最初から全部やらせようとするから難しいのであって、ある程度やってあげてその後の大事なところだけ、「やれたね」というところを味あわせるというようなやり方などが、この子たちには良いのです。それともう一つは、決して諦めないことです。1回や2回誘っても諦めない。1回誘ってダメだったら1分待ってみる。そしてもう1回2度目を誘ってみる。それでダメなら3分待ってもう1度誘ってみる。こうやっていく中で、段々に気持ちが動いているなと思った時に、写真を見せたり、やって見せたりして、こういう風になれば良いのだよ。こういうことができるのだよというように、本人の気持ちが動き始めた時に、やることを教えると、応じられるようになるのです。それが、「嫌だ、嫌だ」と言っている時に「これをやれ」「あれをやれ」言って写真を見せてやらせてもできないのです。『あなたがやりたいことは、やらなきゃならないことはこういうことだ』『私がこれを求めているのだ』『やって欲しいのだ』『あなたはやればできるのだよ』ということを読得しながら、あの子たちはよく聞いてないなんて簡単に言う人もいますが、そのようなことはありません。よく聞いているのです。インプットはしているのです。ただその理解がなかなか上手くいかないのです。言葉というものは、少なくともその言葉からイメージを描かなければならない。自閉症の人は、そのイメージが描けないのです。イメージ化する力というのが働かないのです。ですから、ローナ・ウィングが障害の三つ組み（想像の障害、言語の障害、コミュニケーションの障害）と言っている中に、想像の障害がありますが、その想像というイメージを描くそのことがなかなかできない。例えば、ごっこ遊びができないとか、それが私たちに分かってきました。ですから、私どもが分かったことと、ローナ・ウィングが言っていること、あるいは、ショプラーが言っていることには、かなり重なっていることも沢山あります。この前、日本自閉症協会で大会を静岡で開いた時に、ショプラー先生の講演を伺いました。何度も会っていますから、色々な話を伺っていますけれども、そのまま一緒に泊まった時に、色々話をしました。「日本ではTEACCHというのは技術的に捉えているようだけど、先生は一体何のためにTEACCHつくったのですか」という大変野暮な質問をしたら、「私は親が我が子が分からないというようなことがあるので、親子の関係を良くする為の方法を色々工夫したところからTEACCHを始めたんです」というようにはっきり私に言われました。このこと私は前に、ショプラーさんの次の後継者と言われるメジオフさんの時にもはっきり話したのは、そういう相手の分かりやすい、相手にとって煩わしい条件を消して、できるだけ分かりやすい快適な条件を整えるということをしないと彼らはこちらを向いてくれないわけです。その中には、私たちは一生懸命頼んで、説得して、分かってもらおうということも大事だし、煩わしい刺激を制限してつい立を立てることもいいですけど、そのつい立だけに頼るのではなくて、私たちがその人にわかりやすい説明をするということ、あるいは視覚刺激が優位であると言えば写真だけでなく、ビデオも大事だし、場合によっては実物も大事です。実際に私たちが演技して、「こうすればいいのだよ」と言ったり、玉

を入れる時は、「ボールをこうやって持って、こういう風にやるのだよ」「こう持ってごらん」と言って一緒に持たせてこうやって入れさせるということも必要になってくる。今話していることは自分がやってきたことです。ですから、ヴィゴツキーのこともそうですし、それから、ショプラーのこともそうですし、さらには、私が今一番大事にしているのは、色々な人になってみる。私の、褒める人、叱る人、落胆する人、喜ぶ人、色々な人になっていながら、この子が分かるような情緒を教えていく。そういうことができるかどうか。情緒を教えることはできるだろうか。非常に難しいことです。アスペルガーの非常に頭が良い人と、その点について話し合ったら、「先生僕には人の情緒は分かりませんよ。でも社会の情緒は分かりますよ。」こう言うのです。「いやぁ、私は、人の情緒は分かるけど、社会の情緒は分からないなぁ、社会の情緒は何なの。」(と言うと)「社会が私たちにどういう気持ちで居るかということは分かる。」と言う。だから、「そしたら、人の情緒と同じではないの」と言う、「いえ、目の前に居る人の情緒は分からないけれども、考えてみて、世の中で、色々な人のことを考えた時に、その情緒が分かるのですよ。」というように言われました。このことに、私は、大変共感しました。そういう言葉を使える、アスペルガー障害の人は、どうしてちゃんと暮らせないのでしょうか。どうして仕事ができないのでしょうか。その人は、高齢者の介護をする仕事をしているのですが、高齢者の介護の仕事を、曲がりなりにもやれるということが分かってきている。ただ、全てがそんなに頭が良くて、自分が人間関係の情緒が分からないということを頭で補って、仕事をしようということが、仕事ができるようになるということまで持っていくのは非常に難しいと思います。今まで、色々なことを述べてきましたが、このレジュメの中で、最初に取り上げたのは、自閉症の人が分かりにくい理由ということです。分かりにくいというのは、『人の考えていることや状況がどのように動いてきているのかという、そういう状況の筋道とか、人の心の中の考えている重みというもの、そういうのが読み取れない。』それは、致命的です。だから、この人にとっては人というのは恐ろしいのです。人というのは煩わしい、疎ましい存在という認知を受けるのです。眼差しが合わないということが特徴としてよく挙げられます。なぜ、眼差しが合わないのかということ、眼差しが合うということは、人の気持ちが自分に向けられていることが分かるということです。人の気持ちが自分に向いているということがたまらなく辛いのです。なぜなら、人の気持ちというものが読めないからです。人が向いていることが疎ましいのです。それを排除するために目と目を合わせないのです。一番端的な例は、猿回しの人が言っている「猿の目を見ないで下さい。敵意を感じて飛び付いてきます。」ということです。動物は言葉が出ませんから、自分の目を見た人は敵だという判断をしています。このような簡単な説明では分かりにくいかもしれませんが、この、「人が見えても気にしない」という意味は、「気にしないようにしている」ということです。気にならないようにしている。人の圧力から逃れているという意味なのです。ですから、ここに書いてあるようなことが、恐らく皆さんが自閉症と出会った場合には、きっと何回も何回も経験されると思うのですけれども、「おかしい。どうしてこんなことになる。どうし

てこんなことをするの。これはおかしいのだよ、頭が変だよ。」と言って、昔は済ませてしまっていた。それが、間違いの元なのです。必ずそうしている以上はなんらかの理由があるに違いありません。その理由を突き止めていかなければ関係はできないのです。つまり、人を理解するということは人に対して好意を持つということです。理解しなくても良い、分からなくても良いということは、好意を持たないということです。だから、親でも好意が分からなくなって、「あの子はしたいようにしてれば良いのです」と言って何も求めないようにしていると、親子の縁はどんどん遠くなっていくのです。親の書いた本を見ると、細かに色々なことを指導して、指導してそれで成功したって言うけれど、あれは指導した事柄が良かったから成功したのではありません。親が、絶えず絶えず子どもに関わっていたということです。課題を常に与えて、課題によって交流をしていたということなのです。そういう説明を、私はその本を書いた親にしました。「ああ先生はそんな風に見るのですね」「私は心理学だから、心理的な事実を捉えるのです。あなたは親だから自分のしていること中心に捉えるのです。その違いがある。客観的に見るとそうなります。子どもの側から見れば、自分に関わって、『これはいけないよ』『これをやれよ』それができたら『よくできたね』と褒めてくれる。これがまさに交流なのです。しかも、受容的交流なのです」お分かりいただけるだろうと思いますけれども、ちゃんと子どもの側で何とか子どもの為になろうと心を砕いて関わっていることが受容的交流なのです。それは当たり前のことなのです。育てるということなのです。だから、副会長の須田さんが、「先生の本を読んで、先生の話聞いてやっと分かった」と、「この受容的交流っていうのは、親がやらなければならないことです、親の愛ですね」というから「その通りだ」と、『育ての心』というのを昔、倉橋惣造先生が幼児教育の基本原則として出しました。つまり、その『育ての心』を私たちは自閉症の人にも持つということが極めて大事だということを強調したいのです。決して諦めず、時には失望もしますけれども気を取り直す。そして色々な方法で関わってみる。ずーっと関わり続ける。それでどうなるのでしょうか？普通の子どもでは早く親が親ということが分かるけれども、この人たちは、長い年月を経て、親が大事なものだということが分かってくるのです。そして親子の関係が上手くいくようになる。人間らしさというものが生じてくる。だから、私たちが決めた幼稚園の生活や、学校の生活の期間では間に合わないのです。知能の高いアスペルガー症候群や高機能自閉症の人は色々なことを覚えるし、立派なことをお話するけれども、人付き合いは教わってこなかった。1人で勉強して1人で頭を磨いて、そして、かなり有名になった人も居ます。かなり立派な発明をした人も居ます。でも、その人たちも、残念ながら人間関係はほとんどありません。周りの人が大事にしてくれただけです。周りの人が大事にしてくれることによって安定することは誰でも起こります。自閉症の人たちに私たちは大事にする人になって欲しい。ここに居る人がそのような大事な人になってくれれば、多くの自閉症の人は助かるわけでして、あえて言うならば、もう40代も過ぎた人が時々困ると電話をかけてきます。本当に簡単なことを私のところに電話をかけてきて、「先生、僕困っているのです。お父さんとこんなま

ずいことをしてしまったのだ」と、「大丈夫、大丈夫。お父さんはそういう風に言ったかもしれないけれど、本心から君を嫌ってはいない」と「明日の朝には違うことを言っているから、今晚は考えないで寝ちゃいなさい。」そういう風なアドバイスをする人間が1人でも居れば、自閉症の人たちや自閉症の人たちの暮らしは楽になるのです。だから人生の中で、この人たちに必要なのは理解者です。おかしな人であるとして突き放して、切り捨てるのではなくて、おかしいかもしれないけど、自分たちと同じ世代で、同じように人生を生きていく仲間の1人なのだという理解を是非して欲しい。それを、より多くの人たちがすることによって、そうしている人たちが身近に居ることによって社会に広がっていくわけです。そういう理解者が増えていくことが、自閉症の人たちの地域生活自立が成り立っていく大変大きな力だと私は思っています。自閉症の人たちが分かりにくい理由というのは、ここにも理屈は書いてみましたが、自閉症者は、先天的な一次的障害として脳の中樞神経系の機能が十分に働かないということが認められています。その機能がどのようなものかは、まだ明らかにされていませんが、推測としては、外部刺激の取り入れ、認知における統合化や中枢化です。統合はまとめること、中枢というのは、それを自分の行動と結びつけて、方針とか状況判断を行うことです。つまり、それができにくいということである。このため、自閉症の人の言動は周囲の人たちと同化されない部分が目立つようになります。非常に異化してくるから、おかしな人だというように見られやすいのです。周囲の人たちによってこの異質とされる状態に対する受容が行われないことから、悪しき差別が生じ、社会の人たちから排除や抑圧される機会が増えてきます。これが、更訂的な二次的障害を引き起こすことになりやすいのです。恐らく、自閉症にとっての桃源郷、良く理解して援助してくれる人が側にずっと居て面倒を見てくれるとしたら、自閉症の人たちは、そんなにおかしく、悪くならないだろうと思うのです。二次的障害というのが、発生することによって、悪い方に悪い方に押し出されていく。養護学校を出た、あのパンダの少年が大人になって、そして、母親が早く死んで、父親が知的障害で、パチンコ狂で家のお金全部を使ってしまって、生活保護は受けていない。妹がまだまだそんな年ではないのに、二十歳くらいから働き続けて一家を支えている。その一家を支えているお金を父親が使ってしまう、その自閉症の兄がむしり取っていく。そういう中で、ごく普通である妹さんは疲れきってしまう。その上兄が家出をして、ホームレスになってしまうけれども、ホームレスの仲間に入れるわけではなく、結局そこで、青春、思春期を過ぎて、異性に対する好意、興味、好奇心を持つようになり、浅草で待ち伏せをして異性に近づこうとする。その前から、異性に言うこと聞かせるためには刃物が必要だということで、それを準備する。ところが1回目は、騒がれて失敗する。その、騒いだ女性は、どう見てもあれは痴漢とかおかしな人だけど、何か変わった妙な人だという感じだと思う。2度目の人は、脅かされたと思って素直について行ってしまって、路地に入った時に大声をあげて、暴れた。その時に、恐らく前の状態(1回目)を思い出して混乱し、そのパンダの犯人は動転して刃物を振るうのです。めった突きをし、出血多量で死んでしまったのです。でも、警察の調書のストーリー

はそうではなくて、ワイセツ行為を仕掛けようとして、騒がれたため刺し殺したというそういう記事が、全国の新聞出る。そして、その自閉症の人は、本当にどうしようもない犯罪を犯した人間として扱われるのです。弁護士がそこに入った時にしゃべることもできない、ただオウム返しに「はい」と言って、調書を取られて警察のストーリーに従った犯行を認めるということになっているのです。結果として、殺人を犯したから罰せられるのは当然ですが、例えば、精神障害で犯罪の意図のない人に対する刑罰は、極めて軽くなるわけであります。しかしながら、発達障害の自閉症のその人は、なまじ相手の言葉に相槌を打ち、その調書を認め、判子を押すことによって、刑罰が決まって無期懲役になるのです。弁護士が関わって色々話をしていると、最後の大事なところは「分かりません」ということになって、犯行の動機も「ただ女性と一緒に歩きたかったのだ」と言う。「歩きたかっただけなのに何故刃物を持つのだ」と問われれば、「人が言うことを聞くにはそういう刃物が有効であるとテレビで見て覚えてきた」と、そんな幼稚な人間が犯罪を犯せるような状態で放置されてはかなわないわけです。市民の平和な生活は乱されるのです。ではどうするのか。みんな縛って監獄へ入れるのか。これは皆さんもご存知かもしれないけれども、衆議院議員で山本譲司さんという人が、秘書の給与のことで刑務所に1年余り入っておられて、『獄窓記』とい本を書き、直に私もお話を聞き、講演も聴きましたけれども、刑務所の中には、知的障害、自閉症の人が極めて多いのです。そしてその人に対しては、何ら専門的な関わりをしておらず、しかも今度少年法は年限を若くするという。結局、罪を犯したことについて社会はどう考えるのか。これを私たちは真剣に考えないと、自閉症の問題と犯罪を結びつけて論ずることはいけないことだと言っているだけではなくて、現に起きている犯罪について私たちは考えて、答えを出していく責任があるだろうと思うのです。ですから私は、これからの課題は、これに取り組むことであるし、自閉症・発達障害支援センターは少なくとも福祉の世界の中で、この障害を考えているけれども、司法の世界で、これを考えるという人たちとどう手を組んでいくかということもこれからの課題になるだろうと思います。ここに書いてあるようなことは、自閉症の人たちは知的障害や精神障害の並存が認められてきているこれも間違いのない。そちらの保護も福祉で、福祉法で救われる人も居ます。知的障害を並存する場合は、言語表現ができにくく、人とのコミュニケーションを持つことは難しい、かつ、人の心情の理解が困難なことから生活状況が不安定になり、強い行動障害が発症することになりやすい。その行動障害というのが、実は、九州でも、カリタスの家の施設における色々な暴行とか、虐待とか報じられていましたけれども、残念ながらこういうことは起きやすい。なぜかという、職員から見ると理不尽な暴れ方をする。利用者から見ると自分の過去の心理的な外傷体験によって不安を感じる。窮屈さを感じて暴れる。その辺のミスマッチがあった時に力と力の拮抗関係になる。人間は弱いですから、残虐的な行動も時には出てくる。でも、私はそれを決して弁護しているわけではない。子どもの立場から見れば絶対許すことはできない。でも、もっと突っ込んで考えたならば、この施設は悪いからといって行動障害、強度行動障害の子を受けてくれる

施設が他にあるかといったら、それはないのです。ありません。行動障害の人を、少なくとも薬を用いて精神病院の中で意志なき人間にしてしまうという方法を取るか、刑務所に閉じ込めるか、施設に入れた場合にこれは人間的な力で回復させるようにする施設が日本にどのくらいあるか。今、強度行動障害の為の手当てというものが、手厚く加えられていますけれども、人の人数を増やすだけで良いものではありません。その内容を私は10年余り研究してきました。何が大事かという説得の技術なのです。それから、上手に抑えることなのです。その上手に抑える技術と説得の技術をマスターする職員が日本に何人居るのだろうか。施設でも恐らく少ないと思います。このことも合わせて申し上げたいと思います。さらに、知的障害を伴わないアスペルガー症候群や高機能自閉症などの高機能広汎性発達障害の人については、言語能力及び知的能力の高さがある一方で、現実場面における生活能力や行動能力が伴わない為にアンバランスな生活状況が見られたり、知的障害を伴う場合の自閉症と同じように他人の情緒が分からなかったり、統合的な状況把握とか状況判断ができないで、周囲の人たちとのミスマッチの状態が顕著に見られるなど、外側から見て分からない自閉症の人の内的世界の事柄がある。だから次の内的世界のところで、本当にこのようにして暮らしているのではないだろうかということを、ずっと私は考え続けてきました。だから、この人は障害なのだということに分かってあげた時に、私たちは「ああ、本人も苦しんでいるのだな。そんなに心配しなくてもいいよ。そんなに怯えなくてもいいよ。不安にならなくてもいいよ」というように言ってあげる。あるいは、「君は少し時間が経てばおさまるよ。大丈夫だよ。」とこう言ってあげる人が側に1人でも居れば違うのです。そういうようなことが、ここの必要な支援のポイントに書いてあります。(3)決して、自閉症児者が社会の側の価値観に合わせることを求めたり、あるいは支援者が自閉症児者と独特の関係や欲求に合わせるだけでもいけない。その間をどうとりもって、どうここに近づけていくか、社会に近づけていくか。だから相手を受け容れる受容というのは、まず、この地球の中の同じ時代に君たちと自分と一緒に住んでいるのだと、そういう認識を持つのです。色々なことが起きるだろうけれども、「自分だけで解決できると思わないで色々な人の力を借りよう」そういうように持っていきたい。今は常識に添えないかも知れないけれども必ずこれから分かるようになる。だから我々が感情的になったり、自閉症の人が動揺していることに巻き込まれて相手が怒ればこっちも怒るというような単純な条件付けをされたりしないようにして、そして、支援者が自閉症の持っている感覚とか感情を素直に受け止めて、何が煩わしくて怒っているのか、嫌がっているのか、音だろうか、光だろうか、温度だろうか、人の声だろうか、そうした周りの状況を見ながら、自閉症の人のそこに置かれている状況というものを理解してということをして是非して頂きたい。そして、「こうすれば良いのだ」「こうして欲しいのだ」ということができることはどんどんやらせる。彼らは1回分かった、のみ込んだことはきっちりやります。驚いたことに、そのやまびこ製作所では、自閉症の人たちの事故は起こらないのです。そういう、動力ハンマーを使っても起きません。怪我をする人は普通の人だけです。だから、自閉症の人た

ちのできることをどんどんやらせるということに私は大賛成です。そして、外国の研究を紹介している人たちが最近言っていることは、色んな支援技法があるけれども、それを集約してみると、3つのことに集約されます。1つは、情緒の安定を図る。コミュニケーションの力を育てる。社会的向上を図る。この(項目の)2、3、4のところが大体集約されています。このことは、発達論的な支援法なのです。つまり、人が発達するのは、情緒の安定と、コミュニケーションと、それから、社会的な交流、そのことを順次進めていく、あるいは、同時進行で行うということもあるかもしれませんが、そこなのだということ、言われるようになってきています。

今私がお話したことは、ずーっと私が長年考え続けて、色んなことを織り込みながら今の時点で皆さんに申し上げたいことの一端を述べたに過ぎませんが、障害、福祉教育の大変な変革期の中で、自閉症は非常に難しい障害であります。自閉症を上手く教育でき、自閉症を地域で上手く支援でき、施設で自閉症を上手く生活できる技術知識を社会に広げていくように、全体のそういうような動きが出てくれば、難しい人に対する支援ができることから日本の障害福祉や障害児教育の展開が見られるのであります。またもや、落ちこぼれる人がいないような、そういう福祉教育を願って私の話しを終えたいと思います。

< 質疑応答 >

小学校 6 年生の男の子 2 人の親

【質問内容】兄に障害があることを弟が理解できていない。年が近いことや、障害が見えにくいこともあり、何度か言って聞かせたこともあるのだが、気持ちの中でそこに反抗したい思いが半分以上占めている様子。

兄弟を離れた方が良いのだろうか？しかし、それでは理解が得られない。

弟の幸せを考えると、将来的に差別的な気持ちを持って欲しくはないし、理解して欲しい。変な話、弟が結婚できるだろうかと心配になったりもする。

何か良いご支援などございましたら教えていただきたい。

【備考】弟には特に障害はない。しかし、怒りっぽいところがある。自閉的なところはない。

弟は現在小学校 6 年生。

大事なことは、実際にお会いしないと分からないのですが、兄弟の問題というのが、基本的には色々特に弟さんの立場に立ってみると、お母さんがお兄さんにかかりつきりになっていたりして、自分の方に向いてないということで、不満を感じることもあるでしょう。その不満の原因は、兄にあるわけですから、お兄さんに対して、非常に嫌な感情を持つということも充分あり得ます。昔私が同じような質問を、『キョウダイ関係をどう考えたら良いか』ということをお母さんに質問したことがあります。先生は、「普通の人というのは、大体において、自立ということにそう苦労はないと言うのです。つまり、自分で人を選ぶのです。ところが、自閉症の人は、自分で人を選べないから、人は関わらないのです。親も、キョウダイがいたら、あるところまでは養護しなければならないけれど、友達ができたり、学校の先生とか、親戚の人と関わったりすることができます。お母さんはお兄さんに手がかかるから、寂しかったり、嫌なことがあった時は、ちゃんとお前（弟）の言うことを聞くから、自分で『助けてね』と言って欲しいというように持っていけばちゃんと対応できる」という風におっしゃいました。私は、そんなに生易しいものじゃないと分かっているから、その時は「はい」と聞いて、後になって、学者の人は気楽なことというなあと思いました。親と話していると、本当に切実だなあと思うんですね。ただ、これは、普通の子どもさんであると、段々と自分が育っていく過程の中で、親を少しよく見ることができるようになってきます。自分の親がこんなにまで兄の大変なことをカバーして育てているということが動機になって、自分が障害児の教育とか福祉に関わっているという人もずいぶんいます。だからやっぱり長く考えるということと、やはり本人（弟）に対して、親の方から「あなたはお兄ちゃんに対して色々こういうことするけれど、お兄ちゃんは可哀想なのだ」と、「これを本当にこれから自分でできないために、小さい時からお母さんが教えなければならないことが多いのだ」と、「だからしてるのだ」と、「それを手伝ってもらえれば、大変嬉しいけど、それが無理だったらば我慢して欲しい」と、「お母さんが言っ

ていることを我慢してね」と、「お母さんはお前（弟）のことを大事にしていけないわけではないけど」という気持ちをやはり弟さんにちゃんと言うことが必要であると思います。そのことを私はちょっと考えたのですが、現実には色々な子どもさんが居られるから、合う合わないかわかりませんが、親というのは子どもから見ると当たり前なのです。だから、アスペルガーの子どもさんも何かと言うと、親に色々ぶつけて来ます。それから、普通の子どもさんでも、ちょっと精神的に弱い時には親にぶつけて来ますから、親は堪ったものではない、お手上げだと思うのです。しかしそれは、長い目で見れば、人間として得られない関係を体験することなのです。私も非常に兄弟が多くて、ずいぶん色々な目に遭って、それで感じたことというのは、一番頼りになるのは親が『喋っていることじゃなくて、見せている姿』なのです。私は、親であっても、支援者であっても、絶対にこの人は良くなる、絶対に良い方に向いてくるという自信とか、信念を持って、どっしり構えて生活を営むというのがどんな場合でも必要だと思うのです。何かこの頃、色んなことをグジグジャ喋る人がいて、動き回る人も多くなってきました。だけど、自閉症の人は、ただでさえ刺激が多いのにまいているわけです。だから、やはり、守ってあげなければいけないし、はっきりと話をしてあげなければならない。そういうところを考えてやはり大事にして欲しいですし、それに、親がいなくなったらやはり頼れるのはキョウダイしかないのです。だから、そのキョウダイ関係も大事にして、小さい時から分かってもらうように説明をしていくのです。親が見せている姿と説明とでかなり分かってくれるのではないかと思います。小学校 6 年くらいになってきたのですから。ちょっと抽象的な答えになりましたけれども、率直に話をしていかれた方が良いでしょう。

中学 2 年生の自閉症の子どもを持つ父親

【質問内容】支援センターについて、自閉症と言っても色々な団体があるし、教育から就労まで、あらゆる年齢、あらゆる状況に対応していかなければならないようですが、果たしてそういう状況、沢山の方たちの様々なニーズに対応していけるのでしょうか。

今、東京でそういうことに関わっているという点で、どの程度のことができるのか。どのような部分まではできたのかお聞きできたらと思うのですが。

ほとんどできていないと言った方が正直なところだろうと思います。大いに変わってきたのは、「京都自閉症・発達障害支援センター」という名前です。東京都が委託したということで、東京都にも責任があるという考えを持っているのです。ですから、東京都の関係部局の部長さんとか課長さんとか係長さんとは非常に頻りに連絡を取り、自閉症の援助のことなどについての報告、連絡を絶やさないようにしています。これは、大変大きな行政との関わりが生じてきています。東京都民というのは 1200 万人くらい居るわけですから、とて

もその1ヶ所でするはずがないので、各区にそういうような相談をする窓口を作ったかどうかと提案をしています。また、これからの問題なのですが、その関係機関、教育とか、福祉とか、保険医療の関係機関の方々に集まってもらって連絡協議会を持っています。そして、できるだけその連絡協議会の人たちと情報を共有しようということをしています。それから、啓発活動として、私自身も、1年に3回東京都の色々なところに行ってお話をしています。それからもう1つは、区などで、直接支援者とか行政の人に対するセミナーがあったらそういったところにも協力したりします。それから、現に学校の先生たちが見学に来られたり、こちらから学校に出向いて行って発達障害のお話をしたり、そういう活動がかなりあります。ですから、相談活動は、電話が本当に鳴り続けるくらいです。本人から「もう俺は自殺してやる」とか、「人を殺さなきゃ気がすまない」なんていうような物騒な電話もかかってきます。それについていちいち悩みながらも、「まあまあ」と言いながら対応しています。また、お母さんから「家には居られない」という時に、ともかく近くのこういう機関あるいは精神科のDr.とか病院を紹介したり色々行っています。充分ではないですけど、今度、抛りは発達障害者支援法なのです。ここに書かれていることは、少なくとも、市区町村はこうしたことについて関心を持って進む方向でいてもらわなければ困るということですから、我々はそれを盾にとって、「法律は施行されているのですから協力して下さい」とか、「やって下さい」というように言えるわけです。そういうようにして、進めていくわけで、実は厚生労働省は今、虐待問題が非常に増えおり、そちらの方に力を入れていますけれども、衛藤副大臣などにも本当にご協力頂いて、これから、厚生行政の中でも、次はやはり本当にこの人たちの一生を通して起きてくる色々な問題を1つ1つ具体的に支援していく方法を考えていかなければならない状況になってきているということです。ですから、今、種が蒔かれて大分県に自閉症・発達障害支援センターができたわけです。その他にも今までおそらく知的障害の療育センターとか色々な活動をしているところもあるだろうと思います。病院とかお医者さんとか、それは連携しながら全県的に、そうした悩みを持った人がとにかく相談できるような体制をまず取って行くということが、大事なことだと思います。ですから、これから少しずつそういう方向に進んでいてもらいたいと思います。そして、日本自閉症協会も、今までも活動してきましたが、できるだけ自閉症・発達障害支援センターと連携して、活動していくようにしたいと思います。また、全国自閉症者施設協議会がありますが、そのような施設協議会も協力していくということで、自閉症に特化した形でまずやってみて、そしてそれをさらに発達障害ネットという形で広げていこうというような動きを今始めつつあります。時間がかかるけれども、これから少しずつ整えていくというようにご理解いただければ良いのではないかと思います。ですから、自閉症の子どもさんをお持ちの方が色々な意味でボランティアとして活動していただくと随分変わっていくのではないかと期待できると思いますので、よろしく願いいたします。